



日本記者クラブ昼食会

日中国交回復への道

藤山愛一郎 日中国交回復促進議員連盟会長

1971年3月19日：帝国ホテル（スカイルーム）

「対等の意味でものがいえない。そういう意味で一日も早く国交を回復して対等の立場でものをいいながら協力体制をつくっていくということが、日本の将来を考えて私は必要だと思います。それは経済ばかりでなく、政治外交の問題も含めて…。近ごろ国益ということがいわれるんですけど、私はそれこそ国益にそった線であると思います」(スピーチから)

page 2

周総理が扱ってくれた訪中・王国権さんとの接触

page 3

台湾問題・日華平和条約解消は前提ではない

page 4

安保条約と軍国主義

page 5

対米戦争は反省しているのに・中国の気持ちをくむ・文革を終えて

page 6

皆が一生懸命に働いている

周総理が扱ってくれた訪中

昨年4月、松村先生に同行して訪中した時、覚書交渉のおわりに一行とともに周総理に会ったわけです。その時は10分ほどで、本当に忌憚のない意見の交換をするというわけにはまいませんでした。周総理はご承知のように西欧の外交官型の儀礼をもってお客様を迎える方ですから一人一人何らかの話題で話をかける。そこで「秋に訪問して、忌憚のないお話をしたい」と申しましたところ「喜んで歓迎する」ということでした。ですから、昨年の秋にまいるつもりでした。10月27日の自民党の総裁選挙がすんでからいくつもりが、たまたま11月には社会党の成田委員長、その他の人たちが北京にいかれることになっており、だんだん遅れてむこうから年が明けてから2月にこいということになったわけです。

時期が全く覚書貿易といっしょになりましたので、覚書貿易の話をするというように想像された方もあるわけですが、私にまいりました招聘状と覚書貿易の招聘状とは区別されてきております。後の状況からみましても、はっきり私の訪中と覚書貿易の交渉団とはわけられている。私も覚書貿易に直接に関係ないと思い、同時に中国側も必要がないことを認めていたという経緯で、私の訪中というのはそういう意味で周総理が扱ってくれたと、私は感じております。

王国権さんとの接触

北京に着きますと王国権さんや覚書貿易の劉希文、除明などが迎えに出ておられ、案内役あるいは接待係、または話し相手としてずっとついてくれました。主として一般的な問題については王国権さんと話をしたんでありまして、北京に着きました翌日、王国権さんが私の部屋に来られて、打ち合わせと同時にいる話のきっかけをつくられて、2時間ほど話をした。それからあと3日間、私の部屋でなくて、別にホテルの中に部屋をとられ王国権さんと呉曙東さんの2人がこられて、話を3回続けてやりました、また帰りがけに1回と合計5回、時間からいえば、8時間半ぐらい話し合いをしました。23日に周総理に会ったわけですが、その前に王国権さんと私とはしょっちゅう会っていました。たとえば、天津のわきの第196師団司令部に

行きましたが、片道約2時間ぐらいかかります。その間王国権さんと私と楊さんという通訳が1人、それだけで行くんですから2時間全部は話しませんけれども1時間半ぐらいは自動車の中でも話しました。

帰りは師団司令部で“茅台酒”をいただきまして、1時間ぐらい自動車の中で居眠りをしましたから、帰りは40～50分ですが、いろんな意味で日本と中国との関係、あるいは国際情勢の見方、中国側の考え方、国内事情 王国権さんは外交官生活が長い人ですから、国内事情ということについては充分だとは私は思いませんが、それでも存分に話をしました。そして23日にはじめて私ども一同が周総理にお目にかかったわけですが、周総理は冒頭に「あなたと王国権との話し合いは全部報告されて聞いています」と言われ、2時間ほど話をしました。帰りがけ3月3日の夕方、さらに約1時間半話しましたが、大変にいそがしい時だったようで、帰ってきてみると翌日にハノイにたっておられました。ですから、食事の機会がなく申しわけないけど、お茶でがまんしてくれということでした。そういうことで話し合いをしましたから、いろいろな意味で私達が聞きたいことも、こちらの言いたいこともある程度は話せたと思っております。

これからお話を申し上げることについての中国側の意向というものは、全部が全部周総理の言ったことでも、また全部が全部王国権だけの言ったことでもありません。チャンポンにしたものがむこう側のだいたいの意向だと思えます。それをご了承いただきたいと思えます。私は個人的な立場で行ったとはいえ、12月に日中国交回復連盟という超党派の連盟の会長になっております。したがって今後の情勢そして日本の事情からみましても、あるいは国連におきます先般の票決の状況から申しても、国交回復ということを一日も早く実現したいし、またそうする方途としてどういう考えをしていくべきかということを中心課題として話を進めたことは無論です。いろいろな意味で話し合ってみましたし、むこう側もいろんな角度で説明してくれたと思えます。要約しますと、日本と中国との国交回復のための交渉に応ずる前提としては、私は二つあると思うのです。一つは精神的な心がまえです。これは過

去において日本が中国大陸に大軍を送って相当に迷惑をかけた、そういうものに対する反省の上に立って、中国側と接衝するという事です。後ほど申しますが、そういうものに対する反省がたりないということがむしろ側の軍国主義論の中にも入っているのですから、そういう点の認識が大事だと思います。

台湾問題

具体的な交渉段階に入る問題としては、何と云っても台湾問題につきております。カナダ、イタリア、あるいはその他の国々が、承認の交渉に入る場合にも必ず台湾問題が出てくる。カナダはそれをどう扱うのかで1年半かかったのですが、一つのカナダ方式ができたから、それに続いてトントンと行ってるような状況だと思います。そういう意味で台湾の問題は日本と中国の関係だけでなしに、他の西欧諸国が中国を承認するという場合でも、必ずこれは中心課題として論議されていることはまちがいございません。われわれとしても容易に避けて通れないことだろうと思います。

そこで一番私達に質問がありましたのは「覚書貿易の共同コミュニケの中に日華平和条約というものが廃棄されなければならない、ということがあるが、いったいそれはどうだ」ということです。日華平和条約は廃棄されなければならないということが、コミュニケの中に書かれましたことについては、私はその会議にも出ておりませんし、その詳細を知っておりません。ですから私がお答えするのは適当だと思いませんが、ただ私がいろいろ話し合ってみたとところによれば、中国側とすれば日華平和条約というものは認めておらんのです。自分の認めてない政府との条約、これが前提です。もちろん同時にそういうものを廃棄するか、しないかということは日本側としても考えなきゃならん。が、中国との国交回復の一大前提条件として考えなきゃならんのは、一つの中国という点です。台湾をふくめて一つの中国、そしてその代表者というのは中華人民共和国であるという認識に立たなければ、国交回復の話し合いにはとうてい入れないんじゃないかと思えます。

日華平和条約解消は前提ではない

そういう意味からいえば日華平和条約を解消するということは前提ではございません。と申しますのは、たとえば日華条約を廃棄しても、仮に台湾共和国というものと、新たな条約をつくるということであれば、廃棄したってなんにも意味がないということなんです。周総理だって「現状をみてごらん下さい。あそこは台湾省政府と中華民国政府と二つあるじゃないですか、だから台湾省政府というものを、われわれも台湾省政府だと言っているのだ」と。

だからわれわれ他民族からいえば、あれは一つのもので、ただ問題は代表者をどっちに決めるかという選択が残ってる問題ではないかと思う。「蒋政権というのは国民の信頼を失わなければ中国に残っていて、われわれと対抗してた。信頼を失ったから台湾に行ったんじゃないでしょうか。したがって一つの中国の政府はわれわれの政府だ」という主張も聞いたわけですよ。最近の国連その他の事情から申しても、逐次国際的な地位が向上しておりますから、そういうふうに判断するのも当然だと思います。

そういう意味で国交回復をするには、そういう割りきり方を日本でもしなければいけない。いまの日本の内部からいえば、日中国交は回復したい。これはおそらく90パーセント以上だろうと思います。しかし90パーセントの方の中に、その際台湾はどうかならんかというのがあるんじゃないかと思えます。こうした問題について、われわれは国内問題としてこれをどういうふうにしていくのか、あわせて考えなければならないと思います。

私の感じから申せば、周総理や王国権さんと話をしておりますけれども、日本との国交回復を希望し、考えておられるのではないかと思います。率直に申しましてカナダも承認した、イタリアも承認した、エチオピアも承認したというけど、やっぱり戦争状態がおさまらない隣のアジアの日本との関係を改善したいという希望があるように思えます。ことに周総理はかつて留学生として来日されて以来、日本に対して非常に理解があると思います。だんだん日本を知ってる人が少なく

なっておりますから、周総理のような方はごく少数だと思います。王国権さん、郭沫若さんのような知日派はだんだん減ってきます。やっぱりそういう知日派は親日家でもあると思います。

いろいろ話してみますと、できるだけ日本との国交回復を早くしたい、しかしそうかといって自分の方からあまり急いでもどうだろうかということだと思います。佐藤総理が国会で、自分の時にはとうてい中国問題はとりあげられないんだといわれたことを材料にしまして、われわれも佐藤さんじゃだめだからもう少しゆっくり先をみているんだというようなことです。そういうことですから何も今日、明日すぐにやれといってるわけではありません。しかし中国側も日本との国交回復を望んでいるというような気がいたします。私は安保をやりました大臣でございますから、そうした問題には自ら多くを論じたわけではございませんが、要するに日本の政治姿勢というものが基本的な問題だと思います。後ほど軍国主義のところでも申し上げますが、何でもアメリカの意見に追従している、その姿勢が困るという形で、集団安全保障体制というものを否定してるとは私は思いません。国交でも回復したら、中国と日本との間で安全保障その他の問題について話し合いをすることがいいんじゃないか、というような感触の話も聞くわけでございます。

安保条約と軍国主義

それから、問題になっているのは軍国主義の問題だろうと思います。この点については二つ三つの問題点があります。

一つはいま安保で申しあげましたように日本は、アメリカのアジア外交に対して無条件で協力をしているんじゃないかということです。アメリカとソ連とは大変ちがうんですが、アメリカの現在やってることはアメリカ帝国主義で、ベトナム、カンボジア、ラオスでやったことは帝国主義として許されることではないという立場です。ことにシアヌーク殿下が北京におられますから、その意味ではシアヌーク殿下を強く擁護している。“アメリカ帝国主義”という言葉を使っています。日本の場合には、日本帝国主義という言葉は使ってな

いように思います。そこにどういう違いがあるかということ、一つの問題だと思います。

要するに日本は現実にアメリカのベトナム政策の中で何らかの軍事的役割をアジアにおいて演ずるのではないだろうか。そしてそれがたまたま例の佐藤・ニクソン会談における“台湾に何かあった場合には日本は重大な関心をもたざるを得ない”になる。それが「いたい重大な関心というのは、どういうことになるんですか、軍隊を出すんですか」というような端的な質問になってくるわけです。それでは過去に日本のやったことと同じようになる。だから侵略主義が復活するだろうということでしょうが、そこまでは言ってない。周総理と話しても独立国が自衛の軍隊をもつことは当然だと言っています。

しかし、近ごろの日本をみていると、相当に軍事予算もふえている。いま言ったようなアメリカ追従の姿勢の上に立って軍事予算がふえたり、あるいは戦争映画ができたり、いろんな意味で……。「日本の若い人は徴兵制にも反対だ。いまの自衛隊の隊員募集にしたら定員通りには集まらない」と、私は言っているような説明をしたんですが……。「国民の皆さんがそうなのではない。一握りの権力をもった人の中に、そういうような考えのもとに行動をしつつあると認めざるを得ない人がいるんだ。それは事実じゃないか」という点に力を入れてわれわれに話しました、そういう意味から、軍国主義論というのが出てくるわけです。そしてそれをいろいろあおる意味において映画だとかいろんなものが、過去の追憶として出てくる。それは政府がやらせてるんだと言います。「そんなことはない、日本の言論の自由の中で、そういうものをやらそうたってなかなかそういくもんじゃないんだ」といろいろ申しますが、しかし、やはり日本の新聞をみていて産軍共同と言われる。あるいはマラッカ海峡から日本まで石油を護送するために何らかの措置を考えなければならないという経済人もいる、と。日本の新聞はよく読んでおりますから、時々出ているのがおのずから一般的な風潮をあおることにもなりつつあるようです。

対米戦争は反省しているのに

例の山本五十六さんの映画なんていう話も出てくるわけで、この映画は、ほとんど皆むこうで問題にしている映画だと言っています。私たちもその話を聞きながらいろいろな角度で質問したりしてみました。私は山本五十六さんを知ってますが、あの人はそんな積極的な侵略主義者だと思わない、と話をいたしますと、こうなんです。「それもそうかもしれない。だが その辺が我々の気のつかないところでしょうけど あの映画を通じてわれわれが感得するところは、アメリカに対しては戦争をするのはこりごりだ。大国と戦争しちゃいかんという反省が出てくることはわれわれも認めるが、しかし中国に対してかつて侵略したことに対する反省は一つも出ていない」。そういう点についている隔意なく懇談をしてみますと、たとえばこういうことを言う。

「日本の諸君が一握りの軍閥に動かされ、その犠牲になって満州国なんかで死んだりした。その人たちを追憶し、丁重に弔いたいという気持、あるいはそういうことを回顧するという気持はわからんことじゃない。当然そういうことは考えられましょ。われわれはそれに対して、直接的に文句を言いたいとは思わない。しかし満州国ができたということは、中国人にとって最大の侮辱である。かつて西欧諸国は中国を侵略した。しかしよその国へきて、勝手に国を作ってそれを左右したというのは、イギリスに香港をわたしたとか、いろんな形があったが、そういうこととは異なる。日本人の力で満州をつくった。これはわれわれとしては許すべからざることだと思ふ。われわれは日本と中国との間の関係をできるだけ改善しようと考えて、その問題はわれわれの頭からできるだけ忘れていかなければならないと思っている。それなのに、日本がそういう問題でわれわれを刺戟するような書き方があると、われわれには反撥するという気持が出てくる。けしからんという気持にならざるをえない」

中国の気持をくむ

私はそういう説明を聞きました時に、なるほどわれわれが考えなかった点にふれてるんじゃないかと思いました。むこうも日本の亡くなった人の追憶、顕彰はわ

からんことじゃない、ということであれば、われわれもそういう点については国交を回復してちゃんとするまで、若干自制することは必要ではないだろうか。同時に自制の上に立つてむこう側にも考えてもらうことが必要ではないか。いずれにしても、こうした問題は、相互理解が不足してるところからきているのではないかと思います。従ってもっと大勢の皆さんが中国に行かれて、こうした問題でそれぞれの角度から話し合いをなさって、そしてむこうの気持をつかんで、またそれに対応して、日本も立場を変えていくということが大変に必要なことです。そのこと自体は決して卑屈なことではないと思います。しかし、話し合いの基礎にむこうの気持をくんでいくということがなければ、こうこじれてまいりました日中関係を打開していくことはできないと思います。

わが国の軍事予算の問題も物価高の現状から説明しましたが略します。結局「何らかの形で軍国主義的行動をおこそうという動きが、現実にならなければならぬ」として朝鮮半島が平和と安全でなければならぬとして朝鮮半島をとった。そして朝鮮半島をふくめた平和と安全のために満州国をつくらなければならない。満州国をつくるには中支に対してもう少し牽制しなくちゃならん 日本の国民はご存知なかったことだろうが、われわれも知らなかった そういう過去の経験を考えると、われわれはいま現実にあるそういう一握りの勢力でも、うかつにいけば日本国民をひっぱっていくかもしれないと思うのはあたりまえじゃありませんか」という言い方もいたします。そういうことで、われわれも考えていかなければならないことが多分にあります。何としても戦争の結末をつけてしまわなければならない。それは国交回復ということであろうかと思ふ。

文革を終えて・・・

今年行ってみて私が著しく感じましたことは、文革が昨年は收拾段階だったと思いますが、今年は文革を終えて新しい段階に一步ふみだしたんじゃないかということです。これは私ばかりでなく、行きました人が一様に感じたことです。この1年間の変化というのは相当に大きい。一つには国際情勢が有利に展開してるということ、

もう一つは食糧事情が非常によくなってきている、ということもあるように思います。安定しながら新しい建設に進んでいっていると言えると思います。たとえばわれわれが昨年まいりました時には、万里の長城はみせてくれと言ってもつれて行ってくれませんでした。が、今年はよるこんでつれて行くということでした。ただ雪がふったものですから、結果的には行かなかったんですが。また写真なども北京市内の山の上から、昨年とはとらないでくれと言われたが、今年は平気でとらせてくれた。覚書事務所の職員も「昨年秋から、自分たちも家族づれでいく行動の範囲が広がった」と言っていました。そういう意味で落ち着いてきてます。昨年は工場見学の時も説明の中で異口同音に「劉少奇路線の洋奴哲学によるものなので、これを廃止した」というような説明が入った。今年はあまりそういうことは聞かなかった。そんなわけで何となく新しい段階に進みつつあるんじゃないかと思いました。

それから文革で使った若い青少年のエネルギーを、非常につよく国を守るということと、産業活動に使っています。

皆が一生懸命に働いている

産業活動を拝見してまいりましたけれども、これはそう完ぺきなものでないことは事実ですが、しかし非常に皆が一生懸命に働いている。われわれのみせてもらった工場の工作機械は優秀なものではございません。が、工員の諸君はたりないものは手づくりでつくって能率を上げていこうという調子で、そのやり方が将来、中国の働いてる人たちの工作技術のレベルをあげるんじゃないかという気がいたします。いまのような状態でいけば5年10年後には、相当な工作力が出てくるんじゃないかという感じがいたしました。そういう意味からいって国交回復して、いわゆる劉少奇の洋奴哲学路線 何でもひもつきで外国におそわるというんじゃないか、日本人からききたいということはたくさんあるんじゃないかと思いますが、地下鉄もみましたが、地下鉄にのる前に、むこうの革命委員の副主任クラスが「われわれは地下鉄でも全部国産で作ってるんだが、日本の皆さんは地下鉄にのってるので経験がある、のったらアドバイスしてくれ」と言っていました。電気

炉の工場でも、中級技術者しかいないから大学の研究室に4人の工員を出して、こういうものにとりかかったという話をしておりました。「北京の日本展示会にこういうものが出品されるということによるこんで見にいこうと思ったところが、日本政府は出品を停止させた。あれは遺憾だった」とも言っていました。

日本の工業力を高く評価していることは事実で、いろいろおそわりたいと言っています。

対等の意味でものがいえない。そういう意味で一日も早く国交を回復して対等の立場でものをいいながら協力体制をつくっていくということが、日本の将来を考えて私は必要だと思います。それは経済ばかりでなく、政治外交の問題もふくめて…。近ごろ国益ということがいわれるんですけど、私はそれこそ国益にそった線であると思います。

質 疑 応 答

原理事長(司会): どうもありがとうございました。では質問に入りたいと思います。

宮元(朝日イブニングニュース): 日華条約を破棄しなくても国交回復の交渉ができるという感じをうけられたといわれましたが、具体的に周首相、王国権さんあたりのどういうことばからうけとられたかお聞かせ願いたいと思います。

答: 日本と中国との国交回復という問題は、一つの中国ということ为前提にして、台湾はその省であるという立場を堅持すれば、それは事後でも解消されるわけですね。だから時期だけにこだわらんと私は思います。向こう側からいえばあれは認めていない条約、無いと思ってる条約なんだから、その条約を解消するという必要はないと思っている

ジェームソン(シカゴ・トリビューン): 中国の宇宙衛星、核開発についてお話をなさらなかったんでしょう

か。なされた場合はどんな点についてお話しなされたんでしょうか。

答：全然核開発の問題にふれなかったわけじゃありません。むこう側は「核を国際平和のバランスの上でもっていなければならぬので、使うために作ってるんじゃない」と強く主張しています。

松本(フジテレビ)：日本がこれからかりに中国と国交回復交渉をする場合には、いわゆるカナダのテーク・ノート方式では無理だろうと伝えられているのですが、これは無理なのか、そうならどうして無理なのか。

答：私は今度のいろんな話し合いを通じて、テーク・ノートという形において、もし会談に入ればそれは成功だと思いますよ。しかしいまのように感情的な食い違いが強い場合は、会談自体にも入れないんじゃないかと思います。それはやはり日本が隣の国であって、台湾に対して経済的にも政治的にもいろいろな繋がりをもっている。ですからカナダ、イタリアとは違うんだという意識があると思います。それは佐藤・ニクソン会談の中の台湾の問題にもふれて、そういうことが言えるんじゃないかと思います。ですから日本に対してはカナダ、イタリアよりももう少し厳しいんじゃないかという判断をいたしております。

若松(中日新聞)：いわゆる相互理解を深めていく上においても、記者交流の問題がやはり一つの手段としてのぞましいのではないかと思うのです。この問題は北京で話題には出ませんでしたか。あるいは何かこの点で感触としてお感じになったことがございましたか。

答：この点では私も出しましたし、一行に田川君がおりますから、田川君からも出しました。その時のあれですと5社ですね。5社ぐらいを充足させ相互に交換するのが適当じゃないだろうか、という考え方を述べておりました。3社でなくて5社ぐらいでやるのが現状では適当ではないか、というのが周総理からの感触です。それと同時にですね。新聞関係の方に印象を申し上げれば、やっぱり新聞社の中で、外報部の方でな

くても政治部の方にも希望者に中国語を習わせて将来、特派員になるような養成をしていただく方がいいんじゃないかと思います。たびたびこれからいかなきゃならぬですから。中国語ができないというのは難点だと思います。むこうは日本語がよくできるんですよ。新華社の方でも……。

質問(読売)：中国は建前として国連に対して米帝国主義の道具というような原則論を出しているわけです。そういう中国がかりに今年の秋あたり国連に入れたらなった場合、喜んで入る用意があるのかどうか。

答：前にインドネシアなんか脱退した当時、別の国連をつくるなんてことを言っておったんですけど、いまそんな考え方はない。むしろ国連がこれを迎え入れて常任理事国にも入れようというような動きがあるわけでしょう。それに対応していくような形をとってる。ただ自分の方から入れてくれとは金輪際言わないだろうとは思いますが。しかし拒否するようなことはないと思います。

広芝(大和タイムス)：素朴な国民感情として伺いたいが、藤山さんは、第一次安保改定の時の責任者の一人だった。その藤山さんが、今度は中国問題にとりくむというのは、大変矛盾しているという感じがするが……。

答：私はよくいろんな機会に言うし、これは私のおやじ以来の考え方だというのですが、日本はアメリカと中国の両方と仲よくしていかなくてはならない。私は現にそれが日本の将来のためにも正しいと思います。ですから私自身はやはりアメリカとも中国とも仲よくしていくと、ただ現状からいえば、アメリカ帝国主義だとかベトナム戦争その他で対立しています。この間に日本がたって橋渡しをする立場には、私はないと思います。

日本は、中国と国交でも回復したら、本当の橋渡しができる立場になろうと思いますけれども、国交も回復しないで、両方から笑われます。ですから私は将来ともそういう考え方でいって、矛盾はないと思います。

アメリカは過去において、他の西欧諸国あるいは日本とちがって、中国を侵略したことはございません。戦争中はむこうの人もいうように国民党、共産党ふくめてアメリカは援助してきている。ただ問題は台湾一つにかかっているわけです。かつて満州国を侵略したとか、あるいはソ連が旅順をとったとか、青島をドイツがとったとかいう類の話は、アメリカにはないんです。ですから、今度の私との話の中でもそういうニュアンスが出てくるんです。ちょうど覚書の方々が会った時にも同総理が「存外、アメリカと早く外交転換する場面があるかもしれませんよ(*)」と言われたそうです。ですから、日本は国策として両方と仲よくしていくのがよい。私はその信念でやります。

質問：日中国交回復のあかつきには日本と中国の間で、安全保障について何らかの話し合いをしていいのではないかと中国側が思っているような感触を得た、というお話でした。これは具体的にはどういうふうにとってよるしいのか。その場合、中ソ条約、日米安保条約との関係はどうなるか。

答：具体的には何とも申し上げかねます。しかし国交を回復した上で、われわれは少くとも中ソ友好同盟条約の中の敵国条項だけはとってもらいたいですね。いろんな意味で……。そういう問題をお互いに平らかな気持ちで話す事態ができるんじゃないでしょうか。ですから国交回復した後の安保というものの形も、私は変わってくるんじゃないかと思う。もしアメリカの中国接近というような方法がとられればなおさら変わってくる。事前に日米安保を廃棄しろとか何とかいってるんじゃないですから、国交回復後の問題として広範囲に考えていっていいんじゃないかと思います。

荒井(NHK)：一つの中国ということからですが、中国としては台湾をどのように処理していこうと考えているのか。形をかえた国共合作だとか自治区とかいろいろあると思いますが……。時間的要素を加味してそういう話があったのかどうか。

答：どういう形でかは、私ははっきり申し上げるような材料をつかんでおりません。しかし何らかの形で話

し合いをつける努力はするんじゃないかと思います。私は話し合いがつかぬなら北京がそんなに台湾をにくんで扱うということは無いんじゃないかと思います。

文責・編集部

昼食会後の日中のあゆみ

1971年3月19日 藤山氏昼食会

* 1972年2月21日 ニクソン訪中

1972年9月29日 日中国交正常化

1978年8月12日 日中平和友好条約締結